

上：隠元隆琦筆  
下：煎茶道具



江戸時代にやってきた革新



# 黄<sup>おう</sup>檗<sup>ぼく</sup>禅<sup>ぜん</sup>と煎茶

黄檗三筆の墨蹟と煎茶道具

令和5年

5月15日(月)

7月21日(金)

## ごあいさつ

皆さんは「黄檗」という禅宗をご存じですか？日本の禅宗は、鎌倉時代に栄西が伝えた臨済宗、道元が伝えた曹洞宗を二本柱とし、駒澤大学は曹洞宗僧侶の学問所を起源としています。黄檗禅は江戸時代に隠元という中国人僧がもたらしました。「インゲン豆」を伝えたと言われる人です。黄檗禅は、中国明代の禅宗儀礼や建築様式を通じて、日本禅宗界に大きな刺激や革新をもたらし、活性化を促しました。

今回の企画展では、黄檗の僧侶とその文化の一端を紹介いたします。ひとつは隠元をはじめとする「黄檗三筆」の墨蹟、もうひとつは黄檗禅を契機に盛行したとされる「煎茶文化」に着目します。

喫茶文化の歴史は、古くは奈良・平安時代に遣唐使や留学僧によってもたらされたとの説がありますが、禅宗との関わりでいえば、入宋した栄西がもたらしたともいわれています。こののち日本では喫茶の風習が広まりますが、それはいわゆる抹茶でした。皆さんの中には抹茶をたしなまれる方もいらっしゃるでしょうが、手軽に口にする機会が多いのは煎茶でしょうか。

普段、何気ない一服に飲んでいる煎茶が、日本人の生活に根付いていくようすを、当時の茶道具などから紹介いたします。

今回の企画展に当たっては、望月惟司様からの寄贈資料を中心に構成されています。展示されている資料はそのごく一部ですが、望月様の多大なるご厚意には深謝を申し上げ、今後の博物館活動に活かしていく所存です。

令和5年5月15日

禅文化歴史博物館館長 村松哲文

## 例言

- ・本冊子は、駒澤大学禅文化歴史博物館企画展「黄檗禅と煎茶文化～黄檗三筆の墨蹟と煎茶道具～」(会期令和5年5月15日～7月21日)の開催に伴い作製した展示解説である。
- ・寄贈資料と表記した資料は、望月惟司寄贈資料(望月コレクション)を表す。それ以外は当館蔵・本学図書館蔵などと表記した。
- ・資料中の旧字体や異体字は、原文の意を損なわない限り、極力新字体に改めて表記した。
- ・資料引用は、現代の視点からみれば不適切な内容がある場合でも、歴史資料としての性格をかんがみ、原文引用を尊重した。
- ・掲載資料の寸法について、墨蹟類は本紙部分の寸法、陶瓷器類は器高の最大値を表示した。
- ・会期中に次の関連行事を企画した。
  - 6月17日(土) 於駒澤大学中央講堂
  - 第43回禅博セミナー「黄檗宗と日本文化～文人茶で楽しむ墨の薫り、茶の香り～」
  - 講師 モート, セーラ(駒澤大学文学部英米文学科教授)
- ・本冊子の編集は、駒澤大学禅文化歴史博物館が行い、以下の分担で執筆した。
  1. 黄檗禅周辺の明僧たち、2. 黄檗三筆の墨蹟 塚田 博(同館学芸員)
  3. 黄檗の伝来と煎茶道具 佐藤 大樹(同前)

### 新規収蔵資料～望月コレクションについて～

今回の企画展では、新規寄贈資料を中心に構成しています。寄贈資料は、望月惟司氏より受けたものです。陶瓷器・茶道具類等173件、墨蹟類等491点にのぼる膨大な資料群を、是非駒澤大学にご意向のもと、令和2年より約1年かけて搬入し、その後の整理分類作業等を経て、今回の公開に至りました。当館では、望月氏よりの寄贈資料を「望月コレクション」と称しています。

望月氏は、かつて中国古物・工芸品・仏具販売を営み、若い頃より中国文物に強い関心を持ち、現地に渡航して熱心に収集を行ってきました。文化大革命以前は、外国人の入国は厳しく、多くの苦勞を伴いながら収集してきました。革命終結後、行動制限が緩和されると、年に2～6回中国へ往來していたとうかがっています。

同コレクションの陶瓷器・茶道具類は南宋～明清代までの青瓷・青白瓷・白瓷を中心とし、日本製のものも含みながら、中近世日本で使用された陶瓷器類を語る上で貴重な資料群です。これらに伴い、中国で盛行し、のちに黄檗文化とともに日本に将来された煎茶道具も充実しています。

墨蹟類は、中国・日本の僧侶や文人の墨蹟など多種多様の中で、とくに黄檗宗の本山萬福寺歴代山主の遺墨をはじめとする黄檗宗僧侶の墨蹟がコレクションの中核を成しています。

# 黄檗禅の

## 渡来前夜

17世紀前半、中国で明が衰え清が勃興すると、その混乱を避け多くの禅僧が日本、とくに長崎に渡航した。隠元隆琦は、先に日本に渡っていた弟子たちの要請を受けて来日、のちに黄檗宗の本山となる黄檗山萬福寺を宇治（京都府宇治市）の地に開創した。

彼らの禅は「明朝禅」と呼ばれ、明代の禅宗儀礼や建築様式を通じて、日本禅宗界に大きな刺激を与え、活性化を促した。まずは隠元の伝えた黄檗禅をとりまく明の禅僧たちを紹介する。

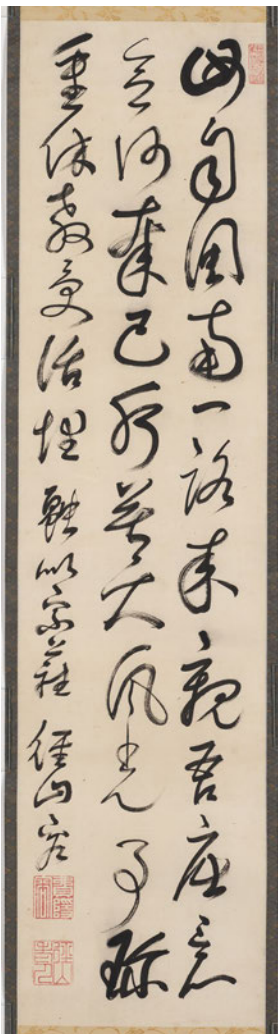
### 費隠通容 (1593~1661)

日本への渡航歴はないが、中国での隠元の師に当たる人物である。密雲円悟に師事し、師の跡を継ぎ、明・崇禎6(1633)年黄檗山萬福寺の住持となり、間もなく隠元に嗣法した。同10(1637)年、黄檗山の住持を隠元に譲る。黄檗山を退いたのちも各名刹で禅風を振るい、嗣法の僧俗は隠元を含め64人と言われる。奔放な行書・草書に特徴がある中、厳格な楷書も得意とした。

### 道者超元 (?~1662)

費隠通容の弟子亘信行弥に嗣法し、隠元からみると法姪の関係に当たる。慶安4(1651)年、隠元より3年前に来日し、長崎を中心に大いに明朝の禅風を振るったが、万治元年(1658)に帰国。隠元門下との間に軋轢が生じたことが要因と言われているが、真相は明らかではない。

隠元に先んじて明朝禅を伝え、多くの僧俗を教化し、その後の明朝禅の展開に大きな足跡を残した。



汝自周南一路来、親吾応意無何哉、  
己水莫大風光事、珍重休教更活埋  
融以宗上座 径山谷圓

七言絶句「汝自周南一路来…」

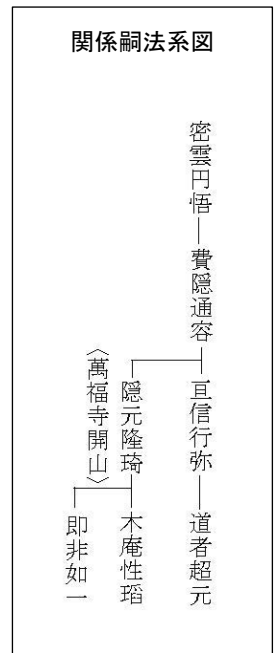
紙本墨書／縦 123.9 cm×横 30.3 cm／寄贈資料



棒頭開正眼  
南山道者元書圓

一行書「棒頭開正眼」

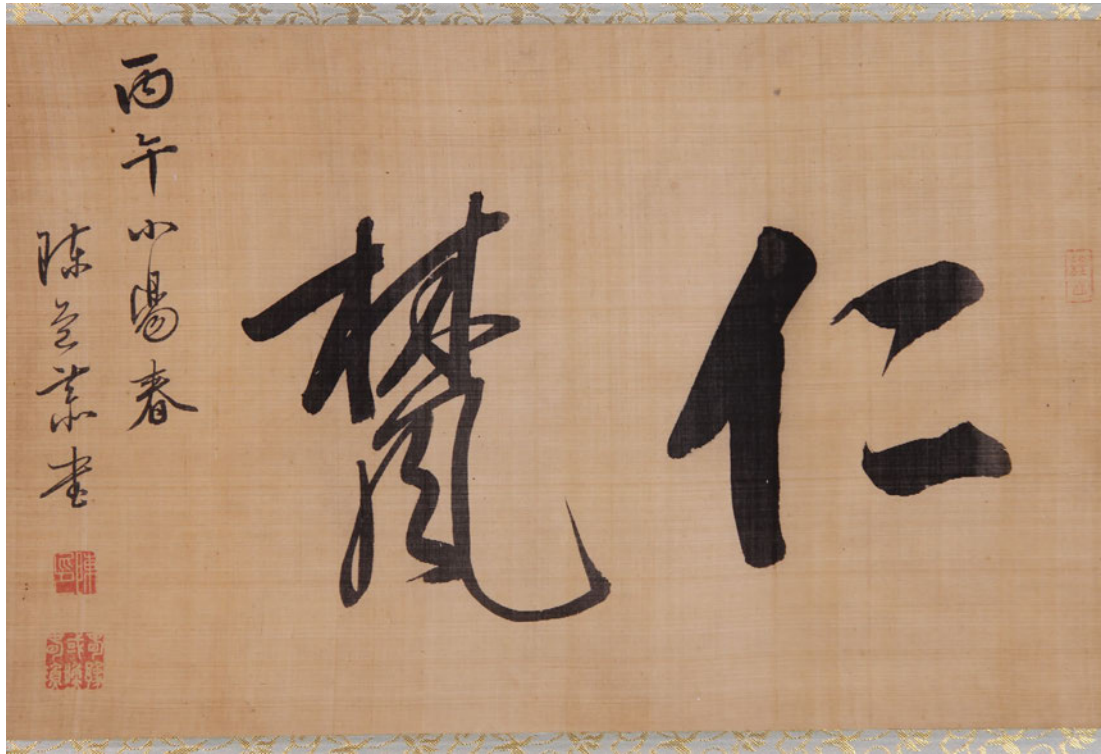
紙本墨書／縦 116.5 cm×横 28.5 cm／寄贈資料



ちん どうえい  
陳道栄（生没年不詳、17世紀頃）

明からの渡来僧の中で、駒澤大学にもっともゆかりのある人物である。吉祥寺（東京都文京区駒込）にあった曹洞宗の学林を「旃檀林」と命名したという。旃檀林は本学の淵源として位置づけられ、明暦の大火（1657年）により、神田駿河台から現在地の駒込に移転した。その後、陳道栄によって「旃檀林」と命名されたという。吉祥寺の山門に掲げられている「旃檀林」の扁額も陳道栄の揮毫と伝えられている（当館2階にそのレプリカを展示）。

遺墨は希少であり、望月氏は寄贈に当たって、まず陳道栄の書を本学に寄贈したい旨を強調されていた。本墨蹟は、「丙午小陽春」と記され、寛文6（1666）年10月の書と推定される。



仁 梵  
丙午小陽春  
陳道栄書  
陳道栄書印

「仁梵」 絹本墨書／縦 25.9 cm × 横 40.4 cm／寄贈資料



「旃檀林」扁額（古色復元、当館2階の複製品） 伝・陳道栄揮毫 原品：吉祥寺（東京都文京区駒込）

# 隱元 木庵 即非

明朝 禪の流れを組む黄檗禪の伝来は、文化面においても、明代の書や煎茶・普茶料理などの文化を日本にもたらし、新たな禅文化が開いた。中でも 隱元隆琦 と彼の二大弟子 木庵性瑫 と 即非如一 は、とくに秀でた能筆家として知られ、世に「黄檗三筆」と称された。

その力強い書風は、御家流が中心であった当時の和様書の伝統に新たな流行をもたらし、煎茶と並んで黄檗文化を代表するものである。

なお「黄檗宗」という宗派名は、明治時代に一宗として独立した以降の呼称であり、それ以前は「黄檗派」または「臨済宗黄檗派」と称する臨済宗の流れを組む一派である。

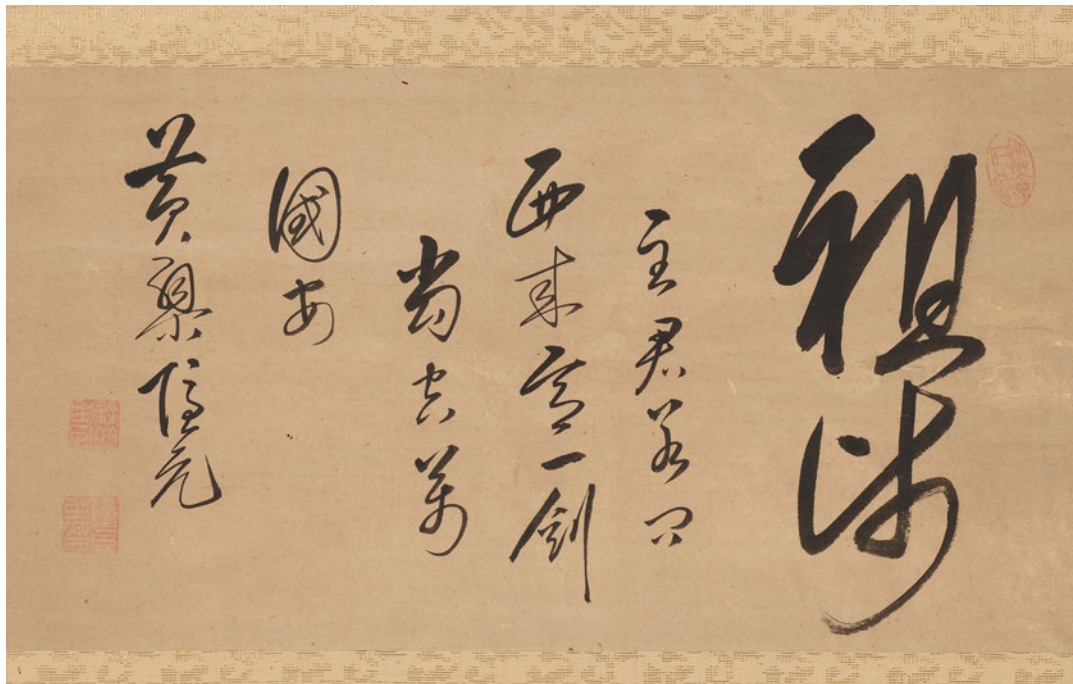
隱元隆琦 (1592~1673)

日本における黄檗宗開祖に位置づけられる隱元は、中国福清（福建省）出身。密雲 円悟 に参じ、その弟子 費隱通容 より嗣法した。さらに費院より 黄檗山 萬福寺（中国福清県）の住持を嗣ぎ、同寺の再興と僧衆の育成に努めるなど大いに禅風をふるった。

承応3（1654）年、63歳の時、道者超元の渡来に遅れること3年、先に渡航していた長崎興福寺の 逸然 性融 の招請を受け来日した。当初は弟子 也嬾性圭 を遣わしたが、渡航中に遭難してしまい、逸然の4回におよぶ招請状の末、ついに日本への渡航を決意した。

京都妙心寺の住持に迎え入れる動きもあったが実現せず、摂津（大阪）普門寺に迎え入れられた。当初は3年で帰国するつもりでいたが慰留され、やがて將軍徳川家綱と謁見、幕府より宇治（京都府宇治市）に寺地を拝領し、隱元は日本在留を決意した。この寺は寛文元（1661）年、黄檗山萬福寺として成立、日本禅宗に新たに黄檗の一派を開いた。

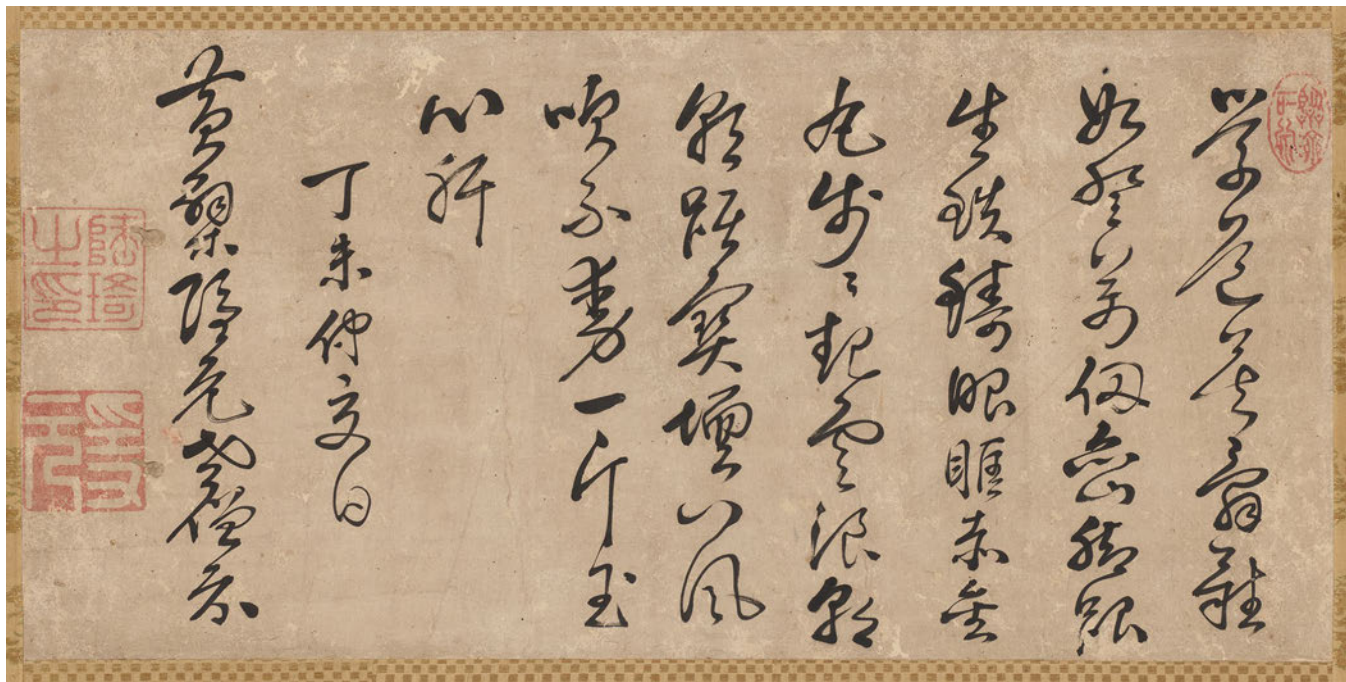
住山3年ののち、萬福寺二世を木庵に譲り、寛文13（1673）年82歳で没した。



祖師  
主君若問西来意、  
一劍当空万国安  
黄檗隱元  
圓圓

「祖師…」 紙本墨書／縦30.4 cm×横56.3 cm／寄贈資料

祖師とは禅宗の開祖達磨を指す。「祖師」に続き七言二句が記される。一句目の「西来意」とは、達磨がインドから中国にやってきた意味のことで、「祖師西来意」で仏法・禅の真髓を表す言葉として用いられる。「主君が若し西来意について問えば、劍が空に当たるが如く真理の世界に到る」と意識できる。主君とは隱元の外護者となる大名などの可能性が考えられる。



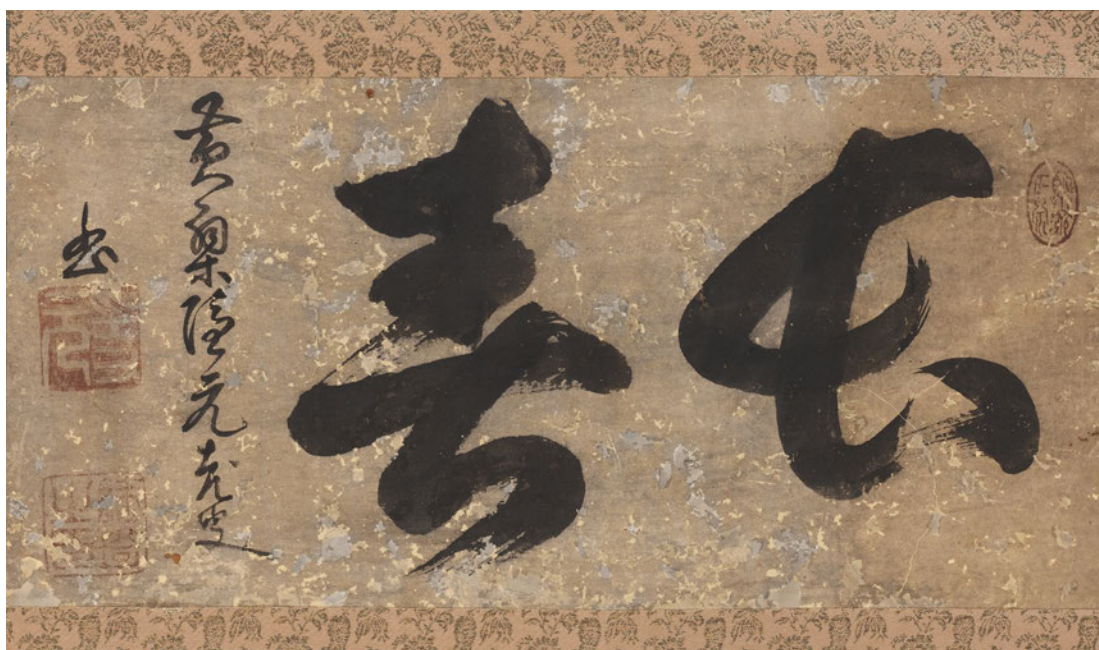
五言律詩「<sup>がくどうはかたきをじすることなかれ</sup>学道莫辞難…」 紙本墨書／縦 25.3 cm×横 52.0 cm／寄贈資料

隠元の語録『擬寒山詩』に収録されている句（『新纂校訂隠元全集』8-3935）。『寒山詩』は唐代の伝説の隠者寒山の詩を収録した詩集とされている。隠元は寒山を敬慕し、その詩になぞらえて『擬寒山詩』と称する百詠を詠んでいる。

本句はそのひとつで、参禅学道には困難を避けてはならず、崖を登るように命をかける覚悟をもってのぞむことが肝要であるとの大意を持つと思われる。

末尾に「丁未仲夏日」とあり、寛文7（1667）年5月の書と判明する。

学道莫辞難、  
如登萬仞巒、  
脚跟生鉄鑄、  
眼睚赤金丸、  
歩々起雲浪、  
朝朝踞宝壇、  
八風吹不動、  
一斤玉心肝、  
丁未仲夏日  
黄檗隠元老僧示  
圓圓



長春  
黄檗隠元老叟  
書圓圓

「<sup>ちやうしゆん</sup>長春」 紙本墨書／縦 25.5 cm×横 52.8 cm／寄贈資料



画家の喜多元規（生没年不詳）が描き、隠元隆琦が賛を加えた頂相（禅僧の肖像画）。像主の密雲円悟（1566～1642）は、隠元の師である費隠通容の師に当たる。隠元は密雲の孫弟子となり、隠元自身も密雲に学んでいる。棒喝による厳しい指導で、その宗風を慕う者は多かったという。

本頂相を描いた喜多元規は、黄檗肖像画の第一人者として高く評価され、隠元・木庵・即非等をはじめとする黄檗の歴代祖師たちの頂相を数多く描いた。本頂相は鮮やかな彩色、洋風画的な陰影法を用いた立体的表現など、黄檗肖像画を象徴する作品といえる。

本像は密雲の没後に描かれたもの。隠元の賛は、密雲の徳を讃えたもので、「七々」は密雲の世寿七七歳を表し、厳しい棒喝を受けた隠元ら12人の弟子によって、仏法が海を越えて広まったことをたとえている。右下部に喜多元規の押印がある。

老和尚、胸羅万象、声震九重、徳沢無量、  
 閱世七々春秋、棒点十二法将、閻浮大樹、  
 覆蔭人間、蔓延孫枝、分出海上  
 黄檗法孫隠元題圓印

密雲 円悟 頂相 喜多元規画・隠元隆琦賛 絹本着色／縦118.8 cm×横50.8 cm／当館蔵



もくあんしやうとう  
木庵性瑠 (1611~1684)

泉州府(浙江省)晋江县出身。密雲円悟や費隱通容に参じ、やがて隠元より嗣法した。隠元渡来の翌明暦元(1655)年に来日し、長崎福濟寺住持となる。

やがて隠元のもとに赴き、黄檗山萬福寺の造営を補佐した。寛文4(1664)年、隠元の譲りを受け萬福寺二世となる。その後も伽藍整備に尽力し、萬福寺の基礎を固めた。

將軍家・大名の帰依厚く、寛文5年將軍徳川家綱に謁見、伽藍建立の金子と資材を賜った。また摂津(大阪府)麻田藩主青木重兼を開基として、江戸白金に瑞聖寺を創建し、その開山に招請された。瑞聖寺の創建は、黄檗宗の関東進出の契機となった。

延宝8(1680)年、慧林性機に萬福寺三世を譲り、山内の紫雲院に退休。貞享元(1684)年、74歳で没した。



潤水漂如藍  
黄檗木庵書  
印



壺中日月長  
黄檗紫雲院木庵老人書  
印

いちぎやうしよ  
一行書 紙本墨書/縦117.0cm×横27.5cm/寄贈資料

『碧巖録』第八十二則の一節に「潤水湛如藍」(潤水湛えて藍の如し)とある。「谷川の水は、一滴一滴には色はないが、深い藍色に変わるまで満ち溢れていく」と、変化する中に仏法の不変の境涯を説いたもの。本墨蹟には木庵のアレンジがあり、「潤水 漂いて藍の如し」としている。

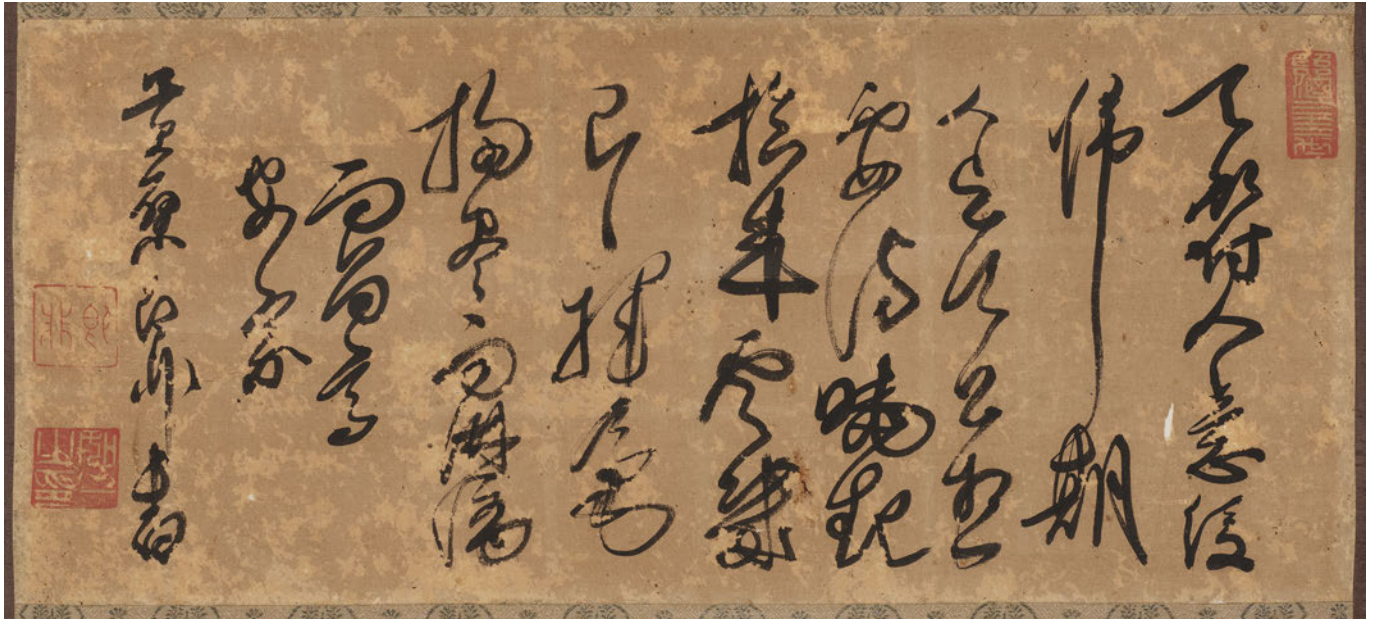
いちぎやうしよ  
一行書 紙本墨書/縦150.3cm×横23.9cm/寄贈資料

「こちゅう、じつげつながし」。「壺中」は壺の中の小さな世界、別天地を表す。その中では日月の概念なく悠久の時間が流れている。時間に追われることなく、あらゆる制約・束縛から解放されている超然とした悟境を表している。

「黄檗紫雲院」と署名していることから、萬福寺を譲って

そくひによいち  
即非如一 (1616~1671)

福清県（福建省）出身。明暦3（1657）年、先に渡海していた師隠元の招請により来日し、長崎の<sup>しょうじゅさんすうふく</sup>聖寿山崇福寺住持となる。万治元（1658）年、崇福寺を弟子の<sup>せんがいしゅうあん</sup>千呆性安に譲る。寛文3（1663）年、黄檗山萬福寺に隠元を訪ね、法兄木庵性瑄とともに<sup>しゅそ</sup>首座（修行僧の第一座・筆頭）を務めた。翌年、長崎へ帰る途中、豊前（福岡）小倉藩主小笠原<sup>ただまね</sup>忠真の懇請により、小倉の地に<sup>こうじゅさんふくじゅじ</sup>広寿山福聚寺を創建してその開山となった。4年後、崇福寺に退休。寛文11（1671）年、56歳で没する。隠元・木庵より年少だが、先に他界してしまった。長寿であれば萬福寺を嗣いだかもしれない。萬福寺では準世代に数えられている。



しちごんげつく てんじんいにあつてまきをゆるす  
七言絶句「天符人意緩帰期…」 紙本墨書／縦 25.6 cm×横 58.2 cm／寄贈資料

突然の雨で、京の高安家に留まることになった時に読んだ句。「天と人の心を合わせ帰る時期を妨げない」との境地で始まっている。一行の文字数は、多い行では一行五文字だが、少ない行では二文字と大胆に配置されている。

『即非和尚洛行草』に「閏夏五日雨留高安幻生家」と題して収録され（『新纂校訂即非全集』3-1067）、寛文4（1664）年閏5月5日の詠詩と思われる。

天符人意緩帰期、  
人与天公想要詩、  
曉起拾来雲幾片、  
揮毫掃尽雨淋漓、  
雨留高安家  
黄檗即非書 圓



即非書 松友  
圓 圓

ゆうしゅう  
「友松」 紙本墨書／縦 27.5 cm×横 64.7 cm／寄贈資料



黄檗三筆の一人、即非如一の頂相（<sup>ちんそう</sup> 禅僧の肖像画）。  
 画者は密雲円悟頂相と同じく喜多元規。右下部に「喜  
 多氏」「元規」の印文がある。賛は即非の弟子・千呆  
 性俊（<sup>せんがいの</sup> 1636～1705）。千呆（千猷とも）は即非ととも  
 に来日し、のちに即非に嗣法した。

万治元（1658）年、即非が中興開山となった長崎崇  
 福寺を嗣ぎ、同寺中興二世となった。

寛文 11（1671）年、師即非が崇福寺にて没すると、  
 即非の舍利を崇福寺に分骨し祀った。

崇福寺には元禄 6（1693）年まで長きにわたり在住  
 し、同 9 年、黄檗山萬福寺六世となる。千呆の賛には  
 「癸亥春杪」（天和 3（1683）年 3 月）の年紀が記され  
 ている。即非十三回忌の供養のため描かれたものであ  
 ろうか。

密雲円悟頂相とともに黄檗肖像画の典型であり、像  
 主・賛者・画者・年代等が明らかな点、弟子が師の像に  
 着賛するなど、頂相の好例である。

賛には即非を指して「当寺開山」と記してあり、こ  
 の当寺とは千呆が即非より嗣いだ長崎崇福寺のこと  
 を指すと思われる。署名の「聖寿」とは聖寿山崇福寺  
 を指す。

当寺開山和尚闍維、  
 舍利無量、隱頭隨、  
 如鏡現像、孝順兒孫特写真  
 永鎮摩尼為供養  
 癸亥春杪  
 聖寿法子俊千猷拝題

そくひ によいちんそう  
 即非如一頂相 喜多元規画・千呆性俊賛 紙本着色／縦 115.8 cm×横 45.1 cm／当館蔵

### 3. 黄檗の伝来と煎茶道具

# 禅の伝来と茶

## ～隠元以前の飲茶文化～

日本への禅の伝来は、臨済宗を伝えた栄西、曹洞宗を伝えた道元が活躍した 12、13 世紀である。この時期、日本と中国の間では日宋貿易が盛んとなり、定期的に貿易船が往来し、人・モノ・文化を運んだ。栄西、道元もこの貿易船に乗り、中国に渡り、日本へ禅宗を伝えたとされる。

#### ○禅宗の伝来と抹茶文化

栄西は 2 度の入宋により日本へ臨済宗を伝えると共に、茶種と抹茶の知識を持ち帰り、後に日本最古の茶書である『喫茶養生記』を著した。

古代から唐代までの中国の茶は固形茶（団茶）を砕いたのち、釜の中で沸騰した湯と共に抽出するものであったが、宋代では粉状に加工した茶（抹茶）を碗の中で点てる点茶法が盛んとなった。栄西が伝えた宋代の抹茶は、8、9 世紀に遣唐使であった最澄や永忠が日本に伝えたと言われる団茶とは異なるものであった。



栄西『喫茶養生記』 元禄 7 (1694) 年 / 江戸：銭屋五郎兵衛。 - 京都：銭屋四郎兵衛 / 本学図書館蔵

栄西が茶の栽培法や薬用、喫茶の功德を述べたもので、日本最古の茶書。栄西が二日酔いの源実朝に献上したものとされる。当資料は、江戸時代・元禄年間に刊行された版本。



青瓷碗 高 7.9 cm / 元～明代 / 中国・龍泉窯 / 寄贈資料

龍泉窯産とみられる青瓷の碗。栄西が日本に伝えた抹茶は、碗の中に粉末にした茶葉と湯を入れ、茶筴で点てるため、煮出した茶を碗に注ぐ形式の団茶よりも碗が大型化している。

#### ○日宋・日元貿易と龍泉窯の青瓷

日宋貿易が盛んになる 12、13 世紀は、中国国内の瓷器生産において龍泉窯が急速な発展を遂げた時期であった。龍泉窯は 11 世紀に興り、急速に発展を遂げ、特に 12 世紀前半の北宋滅亡時に北方から南方への技術者の移動に伴い、南北技術の融合を果たし、南宋時代を通じて隆盛を誇った。

博多遺跡群出土資料から日本の輸入陶器をみると、11 世紀以降は福建省の白瓷が中心であったが、12 世紀後半以降は龍泉窯の青瓷が急増する。



中国の青瓷（茶器、香道具） 宋～元代 / 中国・景德鎮窯、龍泉窯 / 寄贈資料

## ○禅宗と天目茶碗

禅宗が日本に伝えられた12、13世紀頃から、福建省天目山周辺で焼かれた素朴な黒色の瓷器が日本へもたらされる。中国では主要な窯であった建窯の名を冠して建盞けんさんなどと呼ばれ、日本では天目山に留学した禅僧が持ち帰ったことから天目茶碗の名称で呼ばれる。

もともと日本では素朴な日常使いの器として流通したが、16世紀になると、曜変ようへん（もしくは窯変）と呼ばれる特殊な釉薬ゆうやくの変化を経た天目茶碗が紹介され、曜変天目は天下の名器として知られるようになった。



※釉薬・素焼きの瓷器の表面に塗る薬品。焼成することでガラス質の質感を出す。うわぐすりとも言う。

のぎめてんもくぢやわん  
**禾目天目茶碗** 高6.8 cm 福建省建窯／宋～元代／寄贈資料  
 濃褐色の胎土に、鉄質黒釉がかかるのが天目茶碗の特徴であるが、当資料は碗外部の釉のかかりは良くない。内部には薄く釉がかかり、内部底（下写真）には天目釉の黒色を確認できる。また、高台底にも天目釉を確認できる。口縁部のバリが未整治である点など未製品であった可能性も指摘できる。



碗内部底の黒色の釉



## 伝福建省建窯出土資料 福建省建窯／寄贈資料

建窯は福建省建陽県水吉鎮池墩、蘆花坪一帯に位置する窯業遺跡。破片ではあるが、濃褐色の胎土に、鉄質黒釉がかかる天目茶碗の特徴を持つ資料が多く見られる。

## ○天下人と天目茶碗

本学図書館が所蔵する『家忠日記』は、徳川家康の一族であった三河武士・松平家忠が記した日記である。『家忠日記』の天正16（1588）年4月3日の条には、関白・豊臣秀吉から家康へ進物があったと記され、その内訳の中には侘茶の大成者である宗易（千利休）所持の「こからすのてんもく（天目）」が含まれている。



写真パネルにて掲示

天正十六年四月三日の条  
 三日、丙辰、関白様より家康さまへ被進物、  
 兵糧貳千俵、  
 一七ツたいの内はかたたい、一いもかいらの水さし、  
 一金森所持のかたつき、代貳千貫  
 宗易所持  
 一こからすのてんもく、一はねうち竹しやしやく  
 ママ（茶村む）

松平家忠『家忠日記』 天正5（1577）.10-文禄3（1594）.10／本学図書館蔵

# 隠元が伝えた 明代の煎茶文化

隠元隆琦が日本へ黄檗禅を伝えた明末清初には、明代独自の煎茶文化が成熟し、浙江省杭州を中心に文人茶が興隆した時期でもあった。隠元が伝えた煎茶文化は売茶翁を経て、京都の文人層を中心に日本独自の煎茶道として確立するが、伝来の時点ですでに文人趣味を前提とするものであった。

明の初代皇帝・洪武帝は、宮廷に献上されるお茶について、宋・元代の固形茶は加工に手間がかかるとして、葉茶での献上を義務付けた。固形茶から葉茶への変更は、抹茶から煎茶への転換であった。

明代の煎茶では、茶の抽出は急須で行われるようになり、茶碗は小型化し、湯を沸かす炉と湯沸かし（湯罐）が茶器として重要視された。明代の茶碗は白瓷で小振りのものが好まれ、特に景德鎮窯の瓷器は質量ともに明代を代表するものとなった。



急須 高 6.4 cm / 清～ 民国時代 / 中国 / 寄贈資料

## 【茶銚（急須）】

茶葉を入れ、湯を注ぎ、茶を淹れるための道具。素材では、銀、錫が茶の香りを損なわず良く、陶器は土の香りが水に移るため金属より落ちるとされたが、その中では宜興窯の紫砂で焼かれた急須が好まれた。



紫砂蓮葉文急須 高 5.5 cm / 清時代 / 中国・宜興窯 / 寄贈資料



【茶碗】青花人物文茶碗一式 高 3.6 cm / 清時代 / 中国・景德鎮窯 / 寄贈資料

茶を注ぎ飲むための碗。明代では薄手で小振りの白瓷が好まれ、特に景德鎮窯産のものが流通の中心となる。茶碗の中で茶を点てる抹茶と比較して、碗の小型化が著しい。

## 【涼炉・湯沸かし（湯罐）】涼炉・湯沸かし一式

高：涼炉 18.9 cm、湯沸かし 7.9 cm / 江戸時代 / 日本 / 寄贈資料

湯を沸かす湯沸かし（湯罐）と、炭を入れ、火を焚く炉。明代の炉について、詳細な記録は残されていないが、顧元慶『茶譜』には竹炉と呼ばれる竹製の炉が掲載され、売茶翁遺愛品では銅製、瓦製の炉が知られる。



○明代最大の窯 景德鎮窯の白瓷

景德鎮窯は、宋代には青白瓷、黒釉瓷が生産され、日宋貿易によりすでに日本でもその存在を知られていたが、元代には青花をはじめとする新しい技術が生み出された。明代には、青花はさらなる発展を遂げ、景德鎮の主要な製品としてさまざまな種類が作られるようになる。また、永楽帝による朝貢貿易を通じて、広くヨーロッパをはじめとする様々な地域に中国の陶瓷器が運ばれ、景德鎮窯の名を世界へ広めることとなった。

【青花】

青花は酸化コバルトにより瓷器素地に絵付けをし、その上に透明釉を掛けて焼成を行う。青花の起源は判然としないが、遅くとも元代には存在を認識されていた。明代の景德鎮窯では官窯、民窯ともに多くの青花が製作された。

青花獅子文瓶 高28.0 cm/清時代  
/中国・景德鎮窯/寄贈資料



青花茶入 高7.4 cm/明時代  
/中国・景德鎮窯/寄贈資料

五彩分銅型香合 高4.0 cm/明時代  
/中国・景德鎮窯/寄贈資料

五彩は、青花の釉上に多色の色付けをする技法である。釉下の青花と釉上の紅・緑・黄などの彩絵により鮮やかな文様が描かれる。



粉彩茶碗 高7.1 cm/清時代  
/中国・景德鎮窯/寄贈資料

粉彩は五彩の顔料に酸化鉛、ケイ素、ヒ素を少量加え、彩色に濃淡と凹凸を表現したもの。五彩ほどの鮮やかさはなく柔和で、軟彩と称される。

高台裏銘「大清光緒年製」

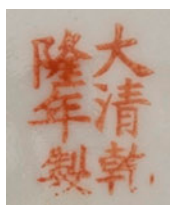


※清・光緒年間 (1875~1908年)  
清・乾隆年間 (1736~1795年)

高台裏銘  
「大清乾隆年製」

珐瑯彩刻花紅釉龍文碗 高6.7 cm  
/清時代/中国・景德鎮窯/寄贈資料

珐瑯は、本来は銅製の素地に釉薬を用いて五色の図柄を描く技術で、日本では七宝焼きと称する。珐瑯彩は瓷胎画珐瑯ともいい、瓷器の素地に珐瑯の彩料で彩色する技術である。

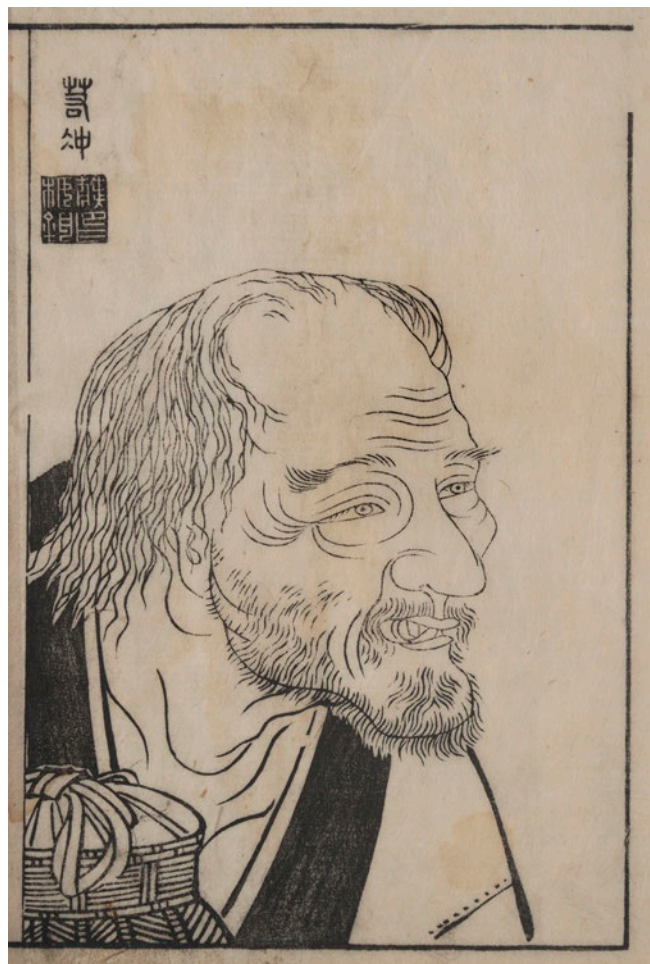


# 売茶翁 と煎茶

明代の煎茶文化を日本へ伝えた<sup>いんげんりゆうき</sup>隠元隆琦に対して、煎茶中興の祖と言われる人物が<sup>ばいさおう</sup>売茶翁である。売茶翁は、元は佐賀・<sup>りゅうしんじ</sup>龍津寺の<sup>げっかいげんしょう</sup>黄檗僧・月海元昭で57歳の時に還俗し、高遊外、もしくは売茶翁を名乗る。<sup>げんぞく</sup>還俗後は単身で京都に出て、茶を売り生活をした。

売茶翁の茶の背景には、当時の禅宗、僧侶、茶禅一味を掲げる茶道（侘茶）への批判があるとされ、その茶風は自由で、茶具を運び、風情の良いところに赴き茶を煎じたとされる。代金の払う払わないも問わず、身分関係なく茶を振る舞う様子は、京都の文人層を中心とした人々の興味関心を惹きつけた。

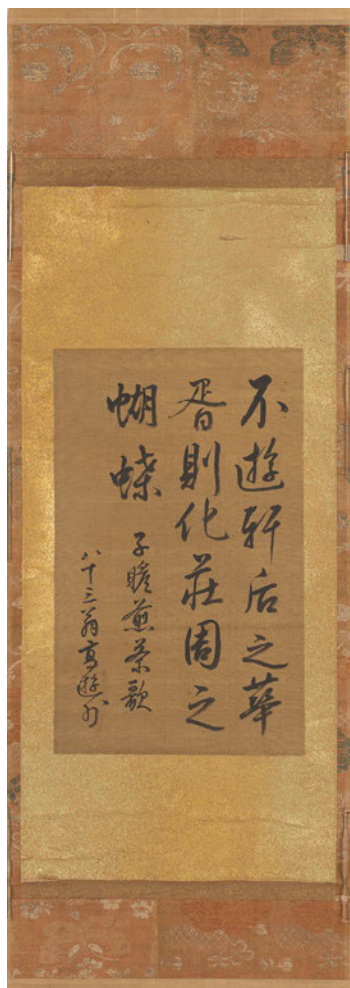
売茶翁の周辺には、書家の<sup>うづらく</sup>亀田翳榮や儒者の<sup>ししん</sup>宇野士新、画家の<sup>いとうじあくちゆう</sup>伊藤若冲などさまざまな人々が訪れ、後の文人煎茶の広まり、煎茶道の確立へと繋がっていく。



<sup>ばいさおうげご</sup>売茶翁偈語 [月海元昭(売茶翁)撰]; 梅山校/宝暦13(1763) / 小川源兵衛/本学図書館蔵

売茶翁の詩文を集めたもので、巻頭には<sup>たんかいじくじょう</sup>淡海竺常による「売茶翁伝」を載せる。

売茶翁の肖像画は伊藤若冲によるもので、人物画をあまり描かなかったとされる若冲であるが、売茶翁の肖像画は多く描いたとされ、その関係性をうかがい知ることができる。



不遊軒后之華胥、  
子瞻煎茶歌、  
八十三翁高遊外

<sup>こうゆうがい</sup>高遊外(売茶翁)筆 七言二句

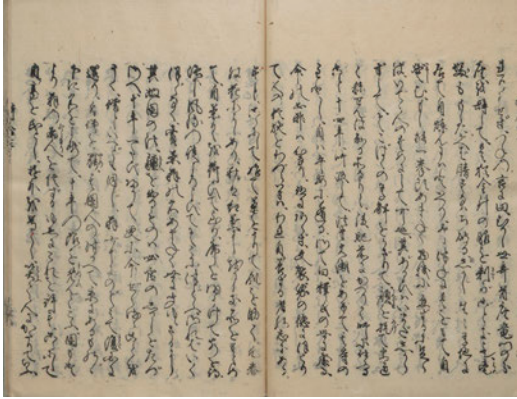
紙本墨書 / 縦 36.9 cm × 横 22.7 cm / 寄贈資料

「子瞻煎茶歌」と題されている。<sup>しせん</sup>子瞻とは、宋代の政治家・文人<sup>そしよく</sup>蘇軾(1036~1101)のこと。その蘇軾が詠んだ「煎茶歌」の一節を書した墨蹟。

「不遊軒」は中国伝説上の皇帝・黄帝のこと。黄帝が昼寝をしていた時、理想郷に遊んだ夢をみた。それが<sup>かしよ</sup>華胥氏の国であった。転じて「華胥」とは吉夢を意味する。すなわちそれは<sup>しん</sup>莊周(莊子)の「蝴蝶の夢」であり、夢が現実かわからない無為自然の境地を、蘇軾が詠った句。売茶翁も「華胥」や「蝴蝶」の中に、煎茶の自由闊達な超越した世界に到ったのであろう。

「八十三翁高遊外」の自署があり、83歳・宝暦7(1757)年の書である。





ばんこうけい みくましこう きんせいしきじんてん  
伴蒿蹊、三熊思孝著『近世崎人伝』 寛政2 (1790) /  
京都：長村太助/本学図書館蔵

『近世崎人伝』売茶翁の項では、売茶翁の売茶について、「春は桜、秋は紅葉」と趣のあるところに茶具を運び、席を設けたとしている。

「凡そ春は花によしあり、秋は紅葉におかしき所をもとめて自茶具を荷ひて至り、席をもうけて客を待つ」



らでんききよく  
黒漆詩画螺細器局 木/高 48.6 cm/中国・清時代/寄贈資料

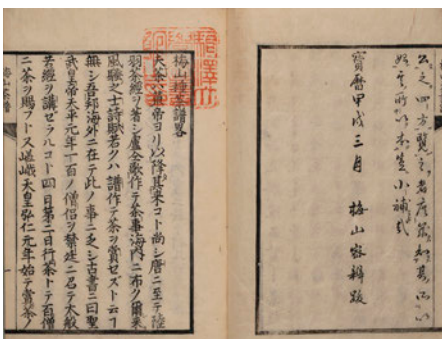
器局は、茶器を分けて収納する竹籠の意味に用いた。実際には、茶器を収納する箱全般を器局と呼び、日本の煎茶道でも茶器収納箱を器局とする。



せかご  
背籠 植物/高 47.8 cm/寄贈資料

### ○近世における煎茶文化の確立

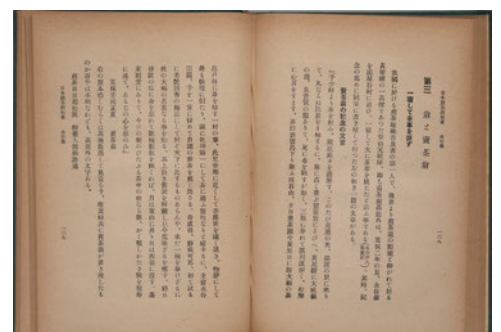
現在に直接繋がる煎茶文化の確立は江戸時代、特に 18 世紀以降とされる。この時期は、売茶翁の煎茶が京都の文人層を中心に浸透し広まる時期であり、もう一方では宇治の永谷宗円により青製煎茶製法が開発され、江戸の山本屋嘉兵衛による商業的な成功を経て、現在の製茶業の基礎が完成する時期でもあった。



ぼいざんしゆちやふりやく  
月海元昭 (売茶翁) 『梅山種茶譜略』 宝暦5 (1755) 年/京都：正始館/本学図書館蔵

売茶翁唯一の著書。梅尾・高山寺の密辨に請われて著したとされる。

中国の茶の歴史からはじまり、日本の茶の歴史、梅山 (梅尾山) と茶の歴史を紹介している。栄西は中国から持ち帰った茶種の一部を明恵に渡し、明恵が梅山で茶の栽培をはじめ、後に大内義隆が梅山から宇治に移植したと解説し、日本の茶栽培の源流は全て梅山 (梅尾山) に連なるとしている。



よしかわかいどう にほんきつさしやう  
好川海堂 『日本喫茶史要：日本煎茶創始者永谷翁』 大正13 (1923) 年/本学図書館蔵

宇治田原町・妙楽寺の好川海堂の著作。現在の煎茶の製法である青製煎茶製法は、宇治田原町の永谷宗円が手揉みの工程を加えることで完成し、江戸の山本屋嘉兵衛により商業的な成功を収めた。本資料は、宇治茶の再興にも寄与した永谷宗円の事績が人々から忘れられていることを憂い、好川海堂が著したとされる。

# 文人 と煎茶

文人とは、広く学問を修め、書画、詩文などをよくする風雅の人の意である。日本の文人趣味は中国の文人世界への憧憬から生じ、中国古典や漢詩をベースとした風雅の精神を、煎茶道具や文房具、文人画などの中に見ることができる。

売茶翁の煎茶は、京都の文人層に受容され、大枝流芳、上田秋成らによる煎茶書の出版へと繋がり、田能村竹田、頼山陽らの活躍した江戸時代後期までにはさらなる広まりを見せた。

## ○文人と煎茶書

江戸時代中期以降、煎茶の広まりとともに文人たちによる煎茶の解説書が刊行される。宝暦 6 (1756) 年に刊行された大枝流芳『青湾茶話』はその最も早いものであり、後に『煎茶仕用集』として重版されていく。『青湾茶話』に続くのが、寛政 6 (1794) 年刊行の上田秋成『清風瑣言』である。

晩年の秋成と交流を持ち、文化文政年間 (1804~1830 年) に活躍したのが、田能村竹田であり、竹田も茶の解説書『茶説図譜』を残している。竹田の文人画、竹田と交流のあった頼山陽の漢詩など、煎茶を題材とした多くの作品は、さらに煎茶愛好家の裾野を広げていく。

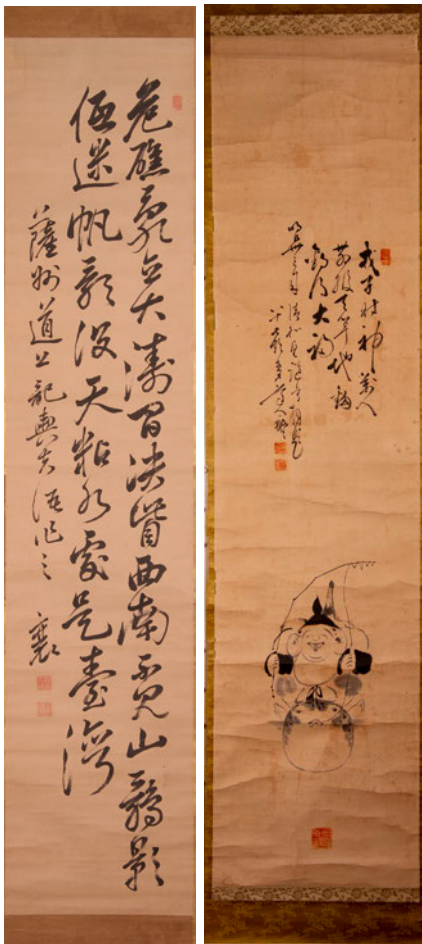


上田秋成『清風瑣言』 寛政 6 (1794) 年  
／京都：本屋重右衛門 / 本学図書館蔵



田能村竹田『茶説図譜』 明治 13 (1880) 年再版／京都：佐々木惣四郎  
／本学図書館蔵

危礁 乱立 大涛間  
扶昔 西南 不見山  
鶴影 低迷 帆影没  
天粘 水处 是台湾  
薩州道上記興志認作之  
襄園 圖



戒子財神、万人敬服、天竿地鈎、釣月大福  
明治三十年清和望謹写拜題  
八十七齡直入道人癡囃囃

## 頼山陽筆 七言絶句 (阿嶋嶺)

紙本墨書／縦 138.2 cm×横 29.8 cm／寄贈資料

頼山陽 39 歳の文政元 (1818) 年 9 月 8 日、九州遊覧の中で鹿児島阿久根に一泊し、翌 9 日に牛の浜の絶景を感じて詠んだ詩。

危礁 乱立す 大涛の間

皆を扶すれば 西南に山を見ず

鶴影は低迷し 帆影は没す

天 水に連(原文：粘) なるところ これ台湾

## 田能村直入画賛 戒子(恵比須) 図

紙本墨画／縦 120.7 cm×横 29.5 cm／寄贈資料

恵比須は七福神の一人。商売・生業繁盛の神として知られている。烏帽子をかぶり狩衣姿で右手に竿を持ち、魚(鯛が多い)を釣り上げる姿が一般的。明治 30 (1897) 年清和望 (4 月 15 日)、直入 87 歳の時の作品。

直入は田能村竹田の養子で、大阪・青湾の地に「青湾茶寮」をかまえ、幕末、近代の文人煎茶に影響を与えた。

ぶんぼうせいがん  
○文房清玩 文人たちが愛した文房具

文房とは書斎を指し、清貧の中でもそこに置く道具類（調度品）が清浄に配されていることを、文人たちは理想とした。特に、文房四宝と呼ばれる硯、墨、筆、紙は最も重要視されるものであった。中国では、すでに北宋代には文房に置く道具類の歴史や変遷などが書物にまとめられ、これを鑑賞（清玩）する趣向の広まりを見ることができる。

日本の文人たちの中でも、美しい道具類で文房を飾り鑑賞する趣向は見られ、頼山陽は漢詩「文房七詠」の中で、花餅（瓶）、硯、水滴、鎮紙、研山（奇石）、筆洗、画を挙げている。



たいしゅぼたんもんすずりばこいっしき  
堆朱牡丹文硯箱一式 高 5.5 cm / 19-20 世紀 / 日本 / 寄贈資料

高台裏銘「葛明祥製」

なまこゆうひっせん  
海鼠釉筆洗 高 6.5 cm / 18~19 世紀  
/ 中国・宜興窯・葛明祥 / 寄贈資料



かつゆうひっせん  
褐釉筆洗 高 2.4 cm / 18~19 世紀 / 中国・景德鎮窯 / 寄贈資料



あいゆうひっか  
藍釉筆架 高 6.0 cm / 18~19 世紀 / 中国・景德鎮窯 / 寄贈資料



しきおんけん  
紫砂温硯 高 7.2 cm / 20 世紀 / 中国・宜興窯・張鴻坤 / 寄贈資料



底面裏銘「張鴻坤記」

主要参考文献（刊行年順）

- 『田能村竹田全集』（国書刊行会、1916年）  
平久保彰編『新纂校訂隠元全集』第一～十巻（開明書院、1979年）  
安藤英男編『頼山陽詩集』（近藤出版社、1982年）  
大槻幹郎・加藤正俊・林雪光編著『黄檗文化人名辞典』（思文閣出版、1988年）  
林雪光監修『黄檗三筆』（黄檗山萬福寺・全日本煎茶同連盟、1989年）  
『隠元禪師御生誕四百年記念 黄檗隠元』（黄檗山萬福寺文華殿・黄檗文化研究所、1992年）  
平久保彰編『新纂校訂木庵全集』第一～八巻（開明書院、1992年）  
大分県教育庁管理部文化課編集『田能村竹田資料集 絵画編』（大分県教育委員会、1992年）  
京都国立博物館『黄檗の美術—江戸時代の文化を変えたもの—』（大塚工藝社、1993年）  
平久保彰編『新纂校訂即非全集』第一～三巻（開明書院、1993年）  
『フォトガイドマンプクジ』（大本山萬福寺、1997年）  
布目潮風『中国茶文化と日本』（汲古書院、1998年）  
小川後楽『煎茶への招待』（日本放送出版協会、1998年）  
『禅学大辞典』（第六刷、大修館書店、2000年）  
松下智『緑茶の世界：日本茶と中国茶』（雄山閣、2002年）  
石田雅彦『「茶の湯」前史の研究：宋代片茶文化完成から日本の茶の湯へ』（雄山閣、2003年）  
『駒澤大学禅文化歴史博物館常設展示解説書 禅の世界』改訂第二版（駒澤大学禅文化歴史博物館、2009年）  
九州国立博物館『黄檗—OBaku 京都宇治・萬福寺の名宝と禅の新風』（西日本新聞社、2011年）  
『企画展 黄檗の伝来と江戸の禅宗』（駒澤大学禅文化歴史博物館、2016年）  
石葉詰民原著、出川哲朗監訳、徳留大輔・新井崇之訳『中国陶磁史』（科学出版社東京、2019年）  
島村幸忠『頼山陽と煎茶：近世後期の文人の趣味とその精神性に関する試論』（笠間書院、2022年）

企画展

「黄檗禅と煎茶文化～黄檗三筆の墨蹟と煎茶道具～」  
展示解説リーフレット  
令和5年5月15日発行

編集・発行 駒澤大学禅文化歴史博物館  
〒154-8525 東京都世田谷区駒沢 1-23-1  
電話 03 (3418) 9610 (代表)



博物館ウェブサイト



企画展ページ



ぜんぱくマスコットキャラクター  
しし君